

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

望月 みわ

【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院文学研究科

【研究題目】

近代日本の海運政策と日清経済関係：民間企業による対清航路進出の過程

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、日本が東アジア海運市場に本格的に参入していった日清戦争後の日本の対清航路拡張過程を解明し、日本の対清進出のあり方を官民双方の視点から捉え直すことである。とりわけ、汽船会社の設立から事業の拡大過程の全体像を、海運政策の主管官庁である逓信省の補助政策に注目して検討することを具体的な課題とする。民間企業として本研究が検討対象とするのは、大東汽船会社と湖南汽船会社である。両汽船会社は、長江航路の就航を目的として日清戦争後に設立され、政府の補助を受けて海運業に参入した。さらに、両社の設立・運営の中心であり、日清経済関係の将来を見据えて事業を営んでいた白岩龍平の存在である。本研究は海運という日清間の経済関係に即して、両国の協力と対立を実証的に解明する。現代の前提となる19世紀から20世紀初頭の日中関係の対立と協調を歴史的に紐解いていく本研究は、国際相互理解の促進、国家間における問題の解決に歴史学の立場から寄与するものであると考える。

【研究の内容・方法】(800字程度)

第一に、中核となる個人史料として、「野崎家史料」(岡山県倉敷市・野崎家塩業歴史館所蔵)を全面的に活用する。野崎家は、近世～近代の日本を代表する巨大塩田地主で、近代には、当主・野崎武吉郎が岡山県政にとどまらず貴族院多額納税者議員として国政にも影響力を持ったが、武吉郎は中国で活動する日本人の支援も行った。この支援を受けた代表的な人物の一人が、白岩龍平であり、大東汽船、湖南汽船の設立・経営にも野崎家の関係者が関わった。そのため、「野崎家史料」には、白岩と汽船会社に関する史料が多く残されている。

「野崎家史料」に所収されている白岩龍平ら汽船会社関係者の書簡と、大東汽船、湖南汽船の関係書類を重点的に整理し撮影する。これら白岩を中心とする関係者の書簡と会社に関する書類から、汽船会社の設立過程と政府への補助金申請の動向を明らかにし、大東汽船、湖南汽船の事業拡張の過程と経営実態を分析する。

第二に、中村義編『白岩龍平日記—アジア主義実業家の生涯—』(研文出版、1999年)を分析し、日清戦争後から日露戦争前後の白岩の活動を追い、野崎家史料の理解を補完する。

第三に、公文書の調査・分析を行い、対外海運政策にかかわる外務省、逓信省の動向を明らかにする。外務省外交史料館所蔵・外務省記録に所収されている対清航路拡張に関する逓信省と外務省との往復文書と、汽船会社に対する補助金関係史料から、逓信省の政策を分析する。外務省記録の多くはアジア歴史資料センターのwebサイト上で閲覧できる。外務省報告課編『通商彙纂』として刊行されている領事報告から、長江流域の経済状況と汽船航行関係の報告をリスト化する。上記を分析し、領事と現地日本人の視点から大東汽船、湖南汽船の事業を評価する。

【結論・考察】(400字程度)

本研究によって、以下の点を明らかにした。

第一に、野崎家史料を中心とした一次史料の収集によって、大東汽船会社の設立過程をかなりの程度復元することに成功した。大東汽船会社の設立過程には、野崎家をはじめとする岡山県の人脈および資本力が大きな影響を及ぼしており、大阪商船会社との関係も明らかにすることができた。設立後の経営については、従来おそらく未使用の株式会社化初年度の営業報告書を発見し、岡山県の人脈から東京、そして全国の海運業者の人

脈へと拡大していったことや、北清事変における政府との関係が判明した。

第二に、清国で活動する日本人が、郵便の利便向上や郵便局設置について要望を持っていたことがうかがえる史料が多く発見された。さらにそれは、郵便を主管する逓信省の対外政策に対する大きな期待感にもなっており、逓信省はそれに応えるべく郵便局の設置とともに、円滑な郵便輸送を実現するために大東汽船会社の長江航路就航に補助金を与えていたことを明らかにした。

ただし、湖南汽船会社については史料収集を進められたものの分析が未完了であり、今後の課題として残された。